

特集

中村メイコさんのこと

まきの かず み

牧野和美さんの話から（富岡東部）

中村メイコさんの母方の祖母にあたる「橋本すむさん」が、下宇利の浅見登^{のぼる}さん宅（当時）に疎開^{そかい}していた。母親の姉（メイコさんの叔母^{おば}）にあたる「高木綾^{あや}さん」もいっしょだった。

昭和19年の秋頃^{あきごろ}か、富岡国民学校の講堂で、昼にショーを開いてくれた。その当時、中村メイコさんは子役としてデビュー^{どうよう}していて、売れっ子になっていた。童謡^{どうよう}の「お山の杉の子^{すぎ}」などを歌ってくれたことをよく覚えている。マネージャーの人もいっしょにショーに参加^{あきごろ}してくれていた。

ショーが終わると、浅見さんの家に帰るまで、私はメイコさんたちといっしょに歩いていった。「何年生？」と聞くと、「4年生」と答えてくれたので、「じゃあ、同級生じゃん。」と話したことを覚えている。メイコさんは、戦後「田舎のバス」を歌って大ヒットさせた。この歌詞^{かし}の原風景は、当時の新城をイメージしたものだと聞いている。

写真 「東三河の100年」より

「田舎のバス」

田舎のバスはおんぼろ車
タイヤはつぎだらけ
窓は閉まらない
それでもお客さん
がまんをしてるよ
それは私が美人だから
田舎のバスはおんぼろ車
デコボコ道をガタゴト走る
(後略)



▲ 新城駅に並ぶボンネットバス （昭和40年代初期）

メイコさんは富岡行きのバスに
乗られたはずですよ。

すず き かずもと

鈴木一基さんの話から（富岡中部）

中村メイコさんの母方の先祖で、菊池安兵衛^{きくち やす べ え}という人がいます。半原藩主^{はんしゆ}のお側用人^{そばようじん}で、藩の重臣^{はん じゆうしん}でした。幕末^{ばくまつ}に江戸から岡部藩^{おか べ はん}が富岡に移ってきたときに来た北辰一刀流^{ほくしん}の使い手で、その娘さんが「菊池すむさん」です。すむさんは、菊池家から橋本家^{よめ}に嫁に行きました。子どもは7人いましたが、たった一人の男の子は、戦病死^{むすめ}されています。6人姉妹となった一番下の娘^{むすめ}さんが、メイコさんの母親のチェコさんです。すむさんのご主人は、終戦前に急死^{きゅうし}されてしまいます。終戦後、すむさんは、「東京へ行って、娘たちを女学校まで出して、それぞれに手

に職を持たせたい」と、富岡から子ども6人を抱えて東京に出ることになりました。東京では、下宿屋を始め、娘たちを育てました。当時、メイコさんの母親のチエコさんはまだ7歳でした。

メイコさんからみると、曾祖父(ひいおじいさん)が半原藩のえらいお侍さんだったのです。そのため、メイコさんと洞雲寺や富岡とは縁が深いのです。



▲ 現在の洞雲寺 正面が本堂

メイコさんは東京生まれですが、太平洋戦争のさなか、親子3人は奈良県に疎開しました。同居していた祖母、橋本すむさんは、なつかしいふるさとの富岡にもどり、下宇利の元庄屋だった浅見さんの家に疎開しました。母親のチエコさんは、メイコさんを連れて、おばあちゃんの所へ来たようです。

戦後とともに、「大変なおばあちゃまっ子」だったメイコさんは、おばあさんが暮らす富岡にたびたび通うようになります。春のお彼岸などには、お墓参りをかねておばあさんの所に来たようです。

新城駅で降り、バスに乗って富岡に来るときの印象を文にして、歌になったのが「田舎のバス」です。中村メイコさんが書いた文をもとに、手直しされて歌詞になったのだそうです。この話は、メイコさんから直接聞いたので間違いありません。

メイコさんや母親には、富岡は心のふるさとのようになっています。母親が亡くなったあと、自然に囲まれた洞雲寺の墓地に埋葬してくれという遺言にしたがって、富岡に墓地を建てることになったのです。

1995年(平成7年)5月8日、墓碑には父親の名前「中村正常之墓」と刻み、側面には父と並んで亡き母の名前「ちゑ子(チエコ)」,それに自身の名前を入れた石塔を建てられました。絵を描くのを好まれた母親は、特に富岡の風景を気に入ってみえたそうです。

メイコさんは、私の姉の基子と同じ年で、お墓参りに来たときに、姉といっしょに遊んでいました。彼岸花が咲く時期には、両手で抱えるほどいっぱい彼岸花を集めて遊んでいたことを覚えています。



▲ 中村メイコさん建立の墓